

《企画書》

提出者 大沼 しまこ

【タイトル】朝顔はそこに咲いている

【概要】

これは物語です。

仕事と家事と育児に自分も家庭も崩壊寸前の佐希子は、ふとしたことから両親が趣味で嗜んでいる茶道に触れる。そこは柔らかく温かな日常とはかけ離れた穏やかな和の空間だった。両親がもてなすこの空間での出来事が佐希子の心を動かす。離婚寸前の夫、隆弘との関係は会話をすることで徐々によくなり、パートナーとしての絆がうまれてくる。また両親とは多くは言葉を交わさないがそこには静かな両親の優しさがあり、親と子の静かな絆を感じるのであった。そして年月が経ち、両親が亡くなり、佐希子も年を重ね、隆弘も亡くなる。一人になった佐希子だが、これからまた朝顔のように多くの手を広げ、絆という花を咲かせることであろう。人が生きるというのは苦労も多いが、だからこそ遅しく美しい絆が生まれる。

【想定する読者ターゲット】

20～50代の男女

朝顔はそこに咲いている

佐希子と隆弘は何かと喧嘩が絶えなかった。二人の関係は長女の成美が生まれるまでは何となくよかったのだが、次女の真由が生まれて、佐希子が仕事に復帰した頃からこじれてきた。仕事と家事、育児の負担は想像以上に佐希子の体力を奪い、余裕を失わせた。佐希子と隆弘の喧嘩は子供がいようがいまいが関係なかった。佐希子の感情に火がつくと誰にも止められなかったのだ。幼い子供たちも喧嘩が始まると聞こえないふりをして、嵐が過ぎ去るのをただひたすら静かに玩具で遊んで待っていた。成美と真由は小学高学年近くになるとスマートフォンを使わせてもらえるようになったため、SNSやショート動画、音楽を聴いて、家族の中に漂う不穏な空気を感じないようにしていた。そして、成美と真由は週末になると佐希子の両親のユキと昭夫が住む近所の家に入り浸っていた。ユキと昭夫は成美と真由が来るといつだってあたたかく迎えた。そして、趣味で茶道を嗜んでいたユキと昭夫はおいしい季節の和菓子とお抹茶で成美と真由をもてなした。成美も真由もお抹茶は苦いと思い込んでいたのだが、実はまるやかで甘いだった。それは茶葉に直射日光が当たらないように覆いをかけ、旨味成分を葉に貯めるようにし、新芽が出るとその柔らかい新芽だけを丁寧に手で摘んでお抹茶にするからなのだ。そんな小話を昭夫は成美と真由によくした。子供たちは昭夫のそんなちょっとした話が大好きだった。

畳が敷いてあるお茶室は釜で湯を沸かすための炉がくり抜いてあった。炉には灰が敷き詰められ、真ん中に炭が置かれている。その炭に火がつくと、パチッパチッと音をたて釜の湯を沸かした。火のついた炭の近くに添えられたお香に火がともると、忽ちお茶室はお香の香りで満たされた。釜の湯が沸いてくると、心地よい湿度が柔らかく部屋を暖めた。そして、そんな空間が冷え切った成美と真由の心をあたためてくれた。また季節の和菓子は子供たちを喜ばせた。ユキは「今日は一月なので梅をかたどったお菓子ですよ。」などと言いながら、その時々にあった季節の和菓子をいつも出してくれた。昭夫も庭の手入れをしながら、その時々咲いている花を花入れにずっと入れ、茶室に花を添えた。二人が作り出すその空間に成美も真由もうっとりしていた。

成美と真由が佐希子の実家に遊びに行っている間、隆弘と喧嘩をしていた佐希子は隆弘と二人で家にいるのが苦痛だったため、久しぶりに成美と真由を迎えに両親のもとに出掛けることにした。佐希子が不在の家では隆弘がソファでゆったりと横になり、くつろいでいた。佐希子との生活は息が詰まる思いだった。何かを手伝えばそのやり方に文句を言われ、何もしなければしないで嫌味を言われ、なるべく佐希子と顔を合わせないように仕事からあえて遅く帰る日々が続いていた。もうどうすることもできないと感じていた隆弘は離婚を考えるようになっていた。だが、二人の娘のことを思うとその選択にはなかなか踏み切れなかった。

佐希子の実家の玄関に入ると、自宅では見られないような子供たちの楽しそうなお喋りや笑い声が聞こえてきた。佐希子は歯がゆく感じた。自分がこんなに頑張っているのに誰に

も感謝されることもない。頑張れば頑張るほど惨めな気持ちが膨らむ。佐希子が玄関で苛立ちを抑えながら立っていると、通りかかった昭夫が

「寒いから中に入ってお茶でも飲んでいかないかい？」

と、穏やかに声をかけた。佐希子はそんなことより早く帰って家事を終わらせたいと思ったのだが、昭夫の誘いを受け入れた。お茶室は美しく整っている。日常とかけ離れたこの空間が佐希子の苛立ちを少しやわらげた。炉の前でユキが座り、静かにお抹茶を点てている。お喋りをしていた成美と真由もいつの間にか静かに座っていた。

佐希子は美しい和菓子を眺め、一口食べた。口の中に上品な甘みが広がり、思わず目を閉じた。続いてお抹茶をいただいた。茶葉のいい香りがまろやかな甘みを引き立てている。佐希子は苛立った心がほどけていくのを感じた。今までに感じたことのないこの気持ちをもう一度味わいたく、次の週も佐希子は両親のところへ向かった。両親がもてなしてくれるお茶室は日常にはない特別な空間であり、心地よさがあった。このお茶室での時間が佐希子の気持ちを少しずつ変えた。それは家庭の中の雰囲気をも変えた。隆弘が佐希子の気持ちの変化に気付き安堵するほどだった。

ほどなくして佐希子の両親が他界した。仲睦まじい二人は実は60歳を目前にしたバツイチ同士の再婚だった。佐希子の母が実母で父が再婚相手だ。再婚といっても籍は入れてはいなかった。そのため、色々問題はあったが、無事両親を見送ることができた。ユキは厳しい母で、昭夫は穏やかで優しい父だった。佐希子は思うのであった。「あの時、父が玄関にたたずむ私をお茶室に招いてくれなければ、私は崩壊し、家庭をも崩壊させていたに違いない。」佐希子はあのお茶室で感じたことを今でも覚えている。佐希子と隆弘は少しずつ会話が増えていった。そして、いつの頃からか同じ趣味である旅行を楽しむようにまでなった。

そんな隆弘も三年前に亡くなった。佐希子は70歳を迎えていた。子供たちは就職し、それぞれに一人暮らしをしているので佐希子は自宅でほとんど一人だった。日課にしているウォーキングを終え、公園のベンチに座りこんだ。持っていた水筒のお茶を飲みながらベンチの近くに咲く朝顔に目が止まった。最近の酷暑と言われる暑さにも負けず自然に自生している朝顔は見事に多くの花を咲かせていた。どこにでもある朝顔ではあるが、逞しく美しい。

佐希子は、この年になると、ときに一人でいるのもいいのだが、一人でい続けるというのも何とも物悲しいものだなあと、長く連れ添った隆弘を思うのであった。そして、もう一口お茶を飲むと颯爽と家路についたのであった。